

〈 水 稲 〉

○出穂以降の水管理

- ・出穂期から開花期は、水を多く必要とする重要な時期です。出穂後10日間は湛水状態にして水を切らさないように管理します。
- ・その後は間断かん水を基本としますが、気温が30℃以上になる日は、かけ流しかん水の実施により地温を下げて根の機能減退を防止します。また、フェーン現象等で乾燥した風の強い日は、湛水状態を保ち、蒸散による稲体の水分消費を軽減します。
- ・落水時期は、収量や品質等の低下を防ぐため出穂後30日以降とし、早期に落水しないようにします。

○穂いもち防除

- ・葉いもちの発生が認められたほ場では、出穂直前と穂揃期に予防剤（ラブサイド剤またはビーム剤）の茎葉散布を行います。防除する場合は、薬剤や成分の使用回数を厳守します。

○斑点米カメムシ類の防除

- ・今年もアカスジカスミカメの発生量が多く推移しており、注意が必要です。
- ・出穂期10日後頃に、効果の高いスタークル、アルバリン剤の茎葉散布剤を必ず散布します。薬剤の散布7日後までに畦畔や農道の草刈りを行い、アカスジカスミカメの増殖源となるイネ科雑草の除去に努めます。その後、草刈りをする場合は、稲の収穫2週間前以降に行います。
- ・水田雑草があるほ場または牧草地や休耕田等の発生源に隣接しているほ場では、出穂期10日後ころに加えて同24日後頃にもキラップ剤の茎葉散布を行います。
- ・養蜂組合等の協力を得て、「蜜蜂がカメムシ類防除の殺虫剤に暴露する確率が高い場所」ではできるだけ巣箱の設置を避けるか、水稻のカメムシ類防除実施時期に巣箱を退避させるよう、養蜂家へ情報提供をお願いします。

○フタオビコヤガ（イネアオムシ）防除

- ・葉色の濃い水田や、山沿いの水田で集中加害を受ける場合があります。発生が多い場合は、8月上旬までにトレボン粉剤DLかパダン粉剤DL、MR. ジョーカーEW、チューンアップ顆粒水和剤のいずれかを散布します。

〈 大 豆 〉

○開花期の追肥

- ・長期の連作を行っているほ場や、湿害により生育不良となったほ場では、窒素追肥を行い生育の確保に努めます。
- ・追肥は、開花期前後の施用による効果が高く、肥料は硫安または尿素を用い、窒素成分で10 a 当たり5～10kgを施用します。

○雑草対策

- ・中耕・培土で抑えられなかった雑草は、生育期茎葉処理剤等により除草を行います。
- ・畦間や畦間・株間処理剤を散布する場合は、大豆への薬剤付着による薬害を防止するため、専用の飛散防止カバーを必ず着用して散布します。
- ・除草剤は、雑草の種類に合わせて選択します。剤により散布可能な収穫前日数が異なるので、ラベルの使用時期に注意して適正に使用します。

○病害虫防除

- ・黒根腐病や茎疫病の発生は、排水対策を徹底して予防します。また、り病株は、早期に抜き取り、病害の拡大を抑制します。
- ・食葉性害虫（ツメクサガ、コガネムシ類、ウコンノメイガ等）やアブラムシ類は、ほ場の観察により早期発見に努め、発生状況に応じた防除を実施します。
- ・ウコンノメイガは、7月6半旬の茎当たりの平均葉巻数が1.3個以上確認されている場合、8月上旬までにサイアノックス粉剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤、カスケード乳剤、プレバソンフロアブル5のいずれかにより防除します。
- ・紫斑病は、開花期20～30日後に防除を行います。なお、トップジンM及びベンレート剤に対する耐性菌が確認されているため、アミスター20フロアブル、マネージDF、ベルコート水和剤、Zボルドー剤のいずれかにより防除します。なお、向こう1か月の平気気温は高い確率が50%と予報されており、リュウホウの開花期は平年より早まり防除時期も早まる可能性があります。このため、開花期の確認を早めに行い、適期に防除します。

○開花期後の畦間かん水

- ・大豆は、開花期～子実肥大期にかけて最も水分を必要とする時期で、この時期の水不足は莢数の減少や百粒重の低下につながります。
- ・畦間かん水は、葉の状態を目安として、先端の葉が巻いたり、裏返ったりした場合に実施します。かん水は、朝夕の涼しい時間帯に行い、ほ場全体に水が行き渡ったら速やかに排水します。
- ・明きよを設置している場合は、明きよ内へかん水することにより、ほ場内の水分不足を改善する効果が期待できます。

〈 野 菜 〉

今月は野菜の出荷盛期となります。日射しが強く気温が高い日には、いつもより短時間で作業を区切り、休養を取るなど健康管理に十分注意して計画的な作業に努めてください。

○ホウレンソウ

- ・盛夏期は出荷後の軟腐病（トロケ症状）が問題となります。排水対策をしっかりと行い、過湿にならないようハウス側面に古ビニールやマルチを敷き、雨水をハウス内に入れない工夫をします。収穫10日前からはかん水せず、換気や採光を十分に行うことが大切です。
- ・雨水が浸水した部分の株や株元が水浸状になっている株など、腐敗のおそれのあるものは出荷しないようにします。収穫時に土が湿っているほ場の株や、下葉や葉先に黄化が見られる軟弱な株は腐敗しやすいので、混ぜないようにします。

○アスパラガス（長期どり）

- ・生育後半の施肥は今後の株養成に悪影響を与えるので、8月中旬までに終了します。
- ・ほ場が乾燥するとほう芽が抑制され、収量、品質が低下します。3日以上全く雨が降らない場合など、土壌水分が不足する場合は適宜かん水を行います。畝間へのマルチや敷わらは、乾燥防止だけでなく病害、雑草の抑制にも効果があります。
- ・8月下旬頃から夜温が低下すると、斑点病の発生が懸念されるので、発生初期から適切な防除を行います。

○ネギ

- ・夏ネギの収穫期を迎えます。軟白長や太り、しまりをよく見て、出荷基準に達したら計画的に収穫、調製作業を進めます。特に高温時に収穫したものは品質低下が早いので、収穫、出荷作業をすみやかに済ませるよう心掛けます。
- ・施肥や土寄せ時に根を切ると生育停滞や高温期の軟腐病の発生につながる所以、生育状況に合わせた適切な管理を行います。
- ・ネギアザミウマの発生が多くなる時期なので、ダントツ水溶剤等により茎葉散布を行います。さらに、散布2～3週間後にはダイアジノン乳剤40などの有機リン剤で防除します。

○トマト（夏秋どり）

- ・気温の高い日が続き、高温による障害が出やすくなる時期です。晴天日にはハウス内が40℃以上の高温になることもあり、結実せず花落ちしたり、日焼け果、空洞果などの障害果も発生しやすくなります。ハウスサイドおよびツマ面を開放してハウス内の温度を下げるとともに、畝の上に敷きわらをするなどして地温の低下に努めます。
- ・日焼け果やお盆過ぎの裂果を軽減するには、果皮の硬化を防止するため、果実を直射日光にあてないようにするとともに、常に土壌水分を一定の状態に保つよう心掛けます。
- ・セイヨウオオマルハナバチを使用している場合は、高温期でも全ての開口部をネットで覆い、ハウス外への飛行がないようにします。セイヨウオオマルハナバチの使用後は野生化しないよう、巣箱を適正に処理します。
- ・病害虫の発生が多くなる時期ですので、適切な防除を心掛けます。また、整枝は晴天日に行い、傷口を十分に乾燥させ、青枯病や疫病等の感染を防止します。

○キュウリ

- ・露地栽培は収穫盛期を迎えると同時に、成り疲れによる草勢低下が心配されます。肥料切れや水分不足にならないよう、適宜追肥やかん水を行います。併せて、不良果や古い葉は早めに取り除くことで通風を良くし、病害の発生を防ぎます。
- ・草勢の低下により病害虫の発生が多くなる時期です。病害虫の発生源を少なくするため、老化葉や病葉は早めに摘葉し、適切な薬剤で予防散布に努めます。なお、同一系統薬剤の連用は避けま
- ・ハウス抑制栽培では、定植から本葉4～5葉が展開するまでは多めのかん水を行い、土壌水分や空中湿度を十分に保つようにします。

○エダマメ

- ・中生品種の収穫期を迎えます。収穫適期は3日間程度ですので、遅れずに作業を行います。
- ・収穫は気温の低い早朝に行います。高温下では食味が著しく低下するので、収穫後は涼しい場所で速やかに選別・調製を行います。
- ・ダイズサヤタマバエによる莢の加害が増えます。着莢期から子実肥大期にかけて、スタークル顆粒水溶剤（収穫7日前まで）、トレボン乳剤（収穫14日前まで）、スミチオン乳剤（収穫21日前まで）で防除を行います。薬剤散布の際には使用回数や収穫前日数を確認し、品種ごとに適切に防除を行います。
- ・また、カメムシ類の発生も多くなり、子実の吸汁によって不稔粒やわい曲莢、板莢などの原因となります。アグロスリン乳剤などで防除します。

〈 果 樹 〉

○生育状況

- ・りんご、なしの果実肥大は順調に推移し、平年を上回っています。

表 りんご、なしの果実肥大（平成27年7月15日）

樹種	地域	品種	縦経（平年比）	横径（平年比）
りんご	鹿角市	ふじ	5.12cm（109%）	5.43cm（109%）
	横手市	ふじ	5.05cm（104%）	5.78cm（107%）
なし	潟上市	幸水	4.18cm（120%）	4.96cm（121%）

※果樹試験場本場、天王分場・かづの果樹センター調査

○りんご

●摘果

- ・8月に入ると果実が大きくなり、果実の良否がはっきりしてきます。園地を随時見回り、変形果や障害果等を中心に、果実肥大が最も進む8月中旬を目処に見直し摘果を進めます。

●落果防止剤

- ・落果防止剤は下表の使用基準に基づいて行いますが、「つがる」に対するストッポール液剤の散布は、収穫開始予定日2週間前、1,000倍1回散布を基準とします。

〈りんごの落果防止剤使用基準〉

剤の種類	濃度	使用時期	使用回数	展着剤
ストッポール液剤	1,000～1,500倍	収穫開始予定日25～7日前	2回以内	不要
マデック	6,000倍	収穫開始予定日25日前と15日前の2回	2回	不要
ヒオモン水溶剤	1,000～2,000倍	収穫開始予定日21～4日前	2回以内	不要

※いずれの剤とも単用散布とする

●着色管理

- ・早生種の着色管理の時期は、収穫期の予想から判断しますが、天候次第で変動するので、最新の情報や果実の状況を確認して作業日程を決めてください。
- ・葉摘みの前に、支柱立てや枝吊り、徒長枝せん去を行い、樹冠内部まで光が入るようにすること

が着色管理のポイントです。

- ・葉摘みは、収穫開始予定日の約15日前から行い、2回程度に分けて実施します。1回目は、過度の葉摘みは避け、果そう葉を中心に、直接付着している葉を取る程度にします。2回目以降は、果台枝や新梢基部の葉を取りますが強く取り過ぎないようにし、葉摘みと同時に玉回しも実施します。
- ・着色管理は時期的に高温時となりやすく、日焼け果の発生が懸念されるため、摘葉作業は曇天に実施するか、果実温度が高くなった日中に実施します。
- ・猛暑日などの著しい高温が予想される日には着色管理作業を行わないようにします。
- ・ストップール液剤を散布した後で摘葉する場合は、散布後4～5日経過してから行います。

○日本なし

- ・収穫開始まで随時、園内を見回り、変形果・障害果等を中心に見直し摘果を行い、品質向上を図ります。
- ・「八里」、「筑水」の収穫期は、満開後110日以降（8月下旬頃）が目安で、地色が緑色から黄緑色になってきたら、味を確かめて収穫期を判断します。

○ぶどう

- ・棚面が暗くならないように、果実生産に十分な葉数が確保されたら（1新梢当たり展葉数25枚程度が必要）、まだ伸びている新梢を対象にして先端を摘心します。また、副梢が出てきたら1～2枚残して摘心します。
- ・ぶどうの早生種「ポートランド」、「ノースレッド」は満開後70日以降（8月下旬）が収穫の目安となります。「ポートランド」では糖度13%以上、果皮色が黄緑色で収穫します。
- ・収穫は日持ちを良くするため、午前中の気温の低い時間帯に行い、調整は涼しい所で実施し速やかに出荷します。また、一斉収穫でなく熟度の進んだものから収穫します。

○共通

- ・草刈りは、草高25～30cm位で行い、樹と草の水分・養分競合を避けます。また、定植・移植した樹や砂土で栽培されている樹は、土壌の乾燥に留意し、適宜かん水を行うことで生育の停滞を避けます。
- ・農薬の使用にあたっては、登録内容の確認を行い、周辺作物に農薬が飛散しないように注意します。
- ・台風対策は気象庁等から発表される情報に留意し、来襲が予想された場合は、成熟果の収穫や支柱等による樹の補強、施設等の点検・補強を行います。

〈花き〉

本県で最も生産量の多い盆需要期に入りますので、採花・出荷作業が滞りなく行えるように作業環境を十分整えて臨みます。また、秋冬出荷に向けたストックやキンギョソウの定植期となりますので計画的に作業を進めます。

高温、乾燥でアザミウマ類やハダニ類などの害虫の発生が多くなる時期です。ほ場をよく観察し、発生が見られた場合は薬剤の散布間隔を短くし、集中的に防除することが大切です。また、葉害が

発生しやすい時期のため、薬剤散布は午前中の涼しい時間帯に行い、散布濃度、散布量に注意します。

○キク

- ・高温の影響で盆ギクの開花が遅れそうな場合には、朝夕の涼しい時間帯に頭上散水(噴霧)して開花の促進を図ります。また、9月咲きのキクでも、乾燥等で生育が不良なものは、朝夕の涼しい時間帯に畝間かん水を行い、生育の回復を図ります。
- ・盆ギクの出荷作業に追われ、彼岸ギク等の管理がおろそかになりがちです。特に病虫害防除は定期的にしつかりと行います。

○トルコギキョウ

- ・気温の高いときは、朝夕散水してハウス内や茎・葉の温度を下げます。
- ・定植後、遮光資材を掛けたままだと光量不足になるので、日照の多寡に応じてこまめに設置や除去を行います。なお、遮光資材は遮光率が30~40%のものを用います。
- ・8月下旬以降はヨトウガ、ハスモンヨトウ、オオタバコガ等の害虫が葉やつぼみを食害するので、早期発見、早期防除に努めます。

○リンドウ

- ・採花するときは株養成のため、全切りせず、株当たり3本程度残します。
- ・採花を終えたほ場では、残した花を放置すると病虫害の発生源となるほか、次年度の生育に影響するため、花がついている最下段の節で折り取ります。
- ・8月下旬以降に開花する品種は、ネット上げや病虫害防除がおろそかになりやすいので、適期に行います。
- ・病虫害では、リンドウホソハマキやハダニ類などの害虫、葉枯病や褐斑病、黒斑病などの病害をよく観察して防除します。防除を怠ると年々病虫害が増加するので注意します。

○ストック

- ・施肥量は、三要素ともa当たり2kgを標準としますが、前作の肥料が残っている場合があるので、施肥前にEC値を測定し施肥量を決めます。ECが0.5~1.0ms/cmでは30~50%減肥し、1.0ms/cmを超えるようであれば無肥料とします。
- ・定植の2週間前からハウス全体を寒冷しゃで被覆し、十分かん水して地温低下に努めます。また、定植の2~3日前には畝を作り、下層まで水がしみ込むようにたっぷりかん水し、定植に備えます。
- ・定植床の例としては、畝幅120cmの平床とし、定植前に12~15cm×10~8目のフラワーネットを張ります。
- ・苗は、本葉3~4枚時(播種後25日頃)が定植適期です。定植作業はできるだけ地温の上がない早朝~午前中に行います。また、定植時は子葉の付け根を土につけないよう浅植えとし、定植後はたっぷりかん水し活着を促します。

○キンギョソウ

- ・年内出荷のためには今月中に定植及び摘心を終える必要があります。

- ・ストックと同じようには場準備を行います。肥料は窒素・リン酸・加里とも a 当たり1.5kgとします。また、フラワーネットは10cm×7目等を用います。
- ・キンギョソウは根が弱いので、定植は涼しい時間帯に丁寧に行います。7目のフラワーネットの中1条には植えず、両側3条に植え付けます。植え付け後のかん水は、苗が倒れないように、水压を抑えてかん水します。
- ・活着したら本葉1対を残して摘心します。

○ダリア

- ・花卉数が減少し、管状花が露出する「露芯花」を防止する目的で、8月中旬から施設栽培を中心に電照を開始します。
- ・ただし、この頃より前でも、急に曇天が続いたりして、日照時間が極端に少なくなると「露芯花」が発生しやすくなるため、天候にも注意しながら開始時期を決定します。
- ・電照方法は、日長延長で14.5時間の日長管理とし、電球数は10㎡に1球とし、無加温栽培では11月初旬を目途に打ち切ります。
- ・電照栽培では増殖球根が少なくなる傾向があることから、次年度に球根を利用する場合は電照を早めに終了する区を設け、必要球数の確保に努めます。

〈 畜 産 〉

○暑熱対策

- ・最も暑さの厳しい時期ですので、今一度畜舎内外を点検して家畜のストレス軽減に努めることが大切です。
- ・換気扇や扇風機による風向が畜舎全体に同一方向に流れ、よどみができないようになっているか、常に新鮮な水が飲めるよう十分な飲水量か、また、ウォーターカップや水槽が常に清潔に保たれているか確認します。
- ・太陽の高度が下がり西日が入りやすくなりますので、遮光ネットや寒冷しゃを設置して日陰を作ります。また、畜舎周りの草刈りや障害物を除いて風通しを良くします。
- ・飼料給与は、早朝や夜間等の涼しい時間に行い、粗飼料は消化性の高い適期収穫されたものなるべく与え、稲わらは細断して給与するなどして食欲低下を防ぎます。
- ・ハエや蚊の発生を防ぐため、側溝の清掃やくぼみの整備により畜舎周辺に停滞水を作らないようにします。

○牧草（二番草）

- ・オーチャードグラス主体の草地では、一番草刈り取り後40～50日頃が二番草の刈り取り適期となります。この頃になると、葉身が垂れ下がり、下葉や葉先から枯れてきますので、早期に収穫を開始します。
- ・2番草の刈り取りは遅れると夏枯れしやすいので、早めに収穫します。また、夏枯れ防止のため、刈り取りの高さを10cm以上とし、切り口もシャープに切れるように刈歯を整備しておきます。

○稲発酵粗飼料（稲WCS）の収穫・調製

- イネのTDN（可消化養分総量）収量は、熟期が進むにつれて増加しますが、完熟期では牛の嗜好性や消化率が低下するため、収穫時期は黄熟期（出穂後30日頃）が適期です。特に専用収穫機（ダイレクトカット方式）では、良好なサイレージ品質を確保するためにイネの水分含量が65%以下となる黄熟期に収穫することが大切です。また、飼料用イネは茎が太く中空であるため、空気が残りやすく嫌気状態の保持が難しいので、乳酸菌製剤を添加して品質の安定を図ります。
- ほ場管理では、大型収穫機械で作業を行うための地耐力確保が大切です。通常の水稲栽培よりも収穫時期が早くなりますので、ほ場条件や天候に応じた間断かん水や収穫時期を想定した早期落水を行います。

（お問い合わせ先）

秋田県農林水産部園芸振興課

TEL：018-860-1801 FAX：018-860-3822

E-mail：engei@pref.akita.lg.jp